

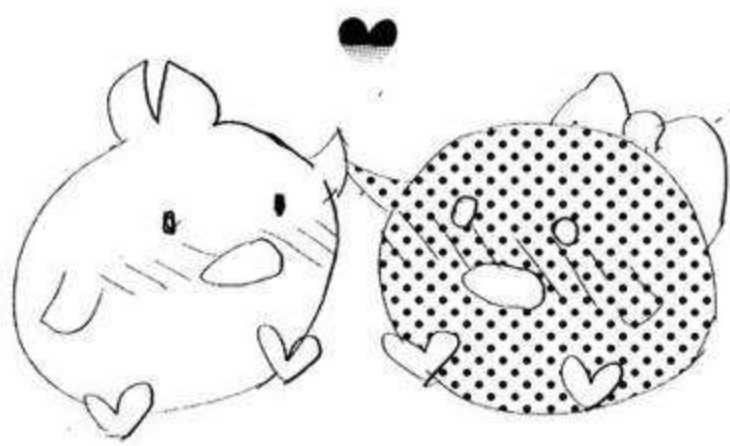


ふたなり  
さしあか  
合同

# フタナリ デュエツト

# ツキウツキ ジュエルツキ

ツキウツキ  
ジュエルツキ



# もくじ

アイモ	005
サントウカ	015
文影	019
すみつ	027
白兎 かなか	037
まきびけいし	045
ふつうでいて	046
柊 翔	051
ZET	055
賀	062
ひのきデス	063
ふつうなのか	066
ひのき	073
ふつうです	077

(敬称略、順不同)

うわああああっ! ?

突然ですが…

いやいや…  
ちよつとまって

何これ?

男の人の…  
おちんちん…だよ

おおおお  
落ち着け私

生えました…

な…何か  
心当たりが  
あるハズ…

「未来さんの野望」  
アイモ



栄養ドリンクに頼るだなんて...

いやいや 私まだ17歳だよ？ ピチピチだよ？

それが 風鳴司令が...



栄養ドリンク？

はい ここ最近忙しかったので作っておきました



うへえ... わかったよ ありがとね

大丈夫だと 思いますけど

副作用があったときは すぐに連絡くださいね



響君がもし留年した時 任務で忙しかったなどと

言い訳されないよう 体調管理を頼む



響ー？ 大きな声が聞こえたけど だいじょうぶ...

ガチガチ



あれか！...

こんな姿 未来に見られたら...

元気になりすぎでしょ！ と...とにかく エルフナインちゃんに 連絡しないとっ！



だって迷惑でしょ？

~~7~~  
OFF

まあエルフナインちゃんに連絡はするとして夜も遅いし明日の朝にしたら？

はい…

へーそれでこんな生えてきちゃったの？

ええ…  
まあそうだけど…

ええっ！  
このまま一晩過すの？



♡

今のうちに既成事実を作っておこうとか思っていないから

そうそう別にこれがチャンスだとか

え？

ちよちよちよっ！

未来ストロップ！

よいしょっど

するする



んまん

ぽん

ちゅぽ

あっ♡  
み…未来っつう!

だ…ダメツ!  
汚いよっ…ひゃっ♡

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

だあもう  
ダメッ…ヒッ  
ちゅぽ

あー♡

ちゅぽ







子作りしよ響♡

うええっ!  
そりやそれっぽい  
今は生えてるけど

さすがに無理だよ!

やってみないと  
わかんないでしょ?

ほら響も  
服脱いで

う...うん

なんたる...  
未来の身体...

いつも見てる  
はずなのにすごい  
ドキドキする



ねえひよっとして  
あの時飲んだ  
ドリンクって...

未来が  
お願いしたの?

近い...

さあなん  
のことかな?

じゃあ挿れちゃうね



もう...

くちゅ♡

ちゅっ♡

イッ

話には聞いてたけど  
初めてって  
こんなに痛いんだ…

いったあ…

ズッ

びん

あッ♡

ヤバイ…  
未来の膣が  
気持ちよすぎて…

少し慣れてきたし  
悟られないようにしないと

うん大丈夫  
それより動くね

み…未来…  
大丈夫…ぶ？

びん

ズッ



あーん♡

あーん♡  
あーん♡  
あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡

あーん♡





お〜…戻った…

いや〜よかった〜  
一時はどうなることかと  
それより みく

どういうことが  
説明してもらえるかな？

え〜つとね  
マリアさんが

グイッ

とか言い出して  
そしたらエルフ  
ナインちゃんが



アッ

アッ

デキマヌヨ



イヨジャアアア

つていうから私と  
調ちゃんもその  
話に乗っちゃって…

でっー芝居打って  
もらって飲ませたの

はあ…もういいや戻ったし  
でも赤ちゃんなんて  
本当にできるの？

いや止まろうよ！  
誰かツツコミいれようよ！

さあ？でも  
できたらいいね

う…うん

まあ…  
そんなことは  
ないだろうけど…

ふわっ





あ...っ ちゅっ  
あ...っ ちゅっ  
あ...っ ちゅっ

離して...ッ!



うう...っ  
もう、だめ...っ



ひん...  
ひびきの味...

...もう、  
わたしも...



服、ぬいじゃおつか...

未来...

あ... 響...



ん...

未来のなか、きもちいい...

響のおちんちん、いっばい擦れてる...



うう... さつきイったばかりなのに...

ん... いいよ。何回でもいっばいイって...







イグナイトの副作用に  
よっておちんちんが  
生えてしまった立花響!

隠してた  
なんてそんな...

隠してた響が  
悪いんだよお...

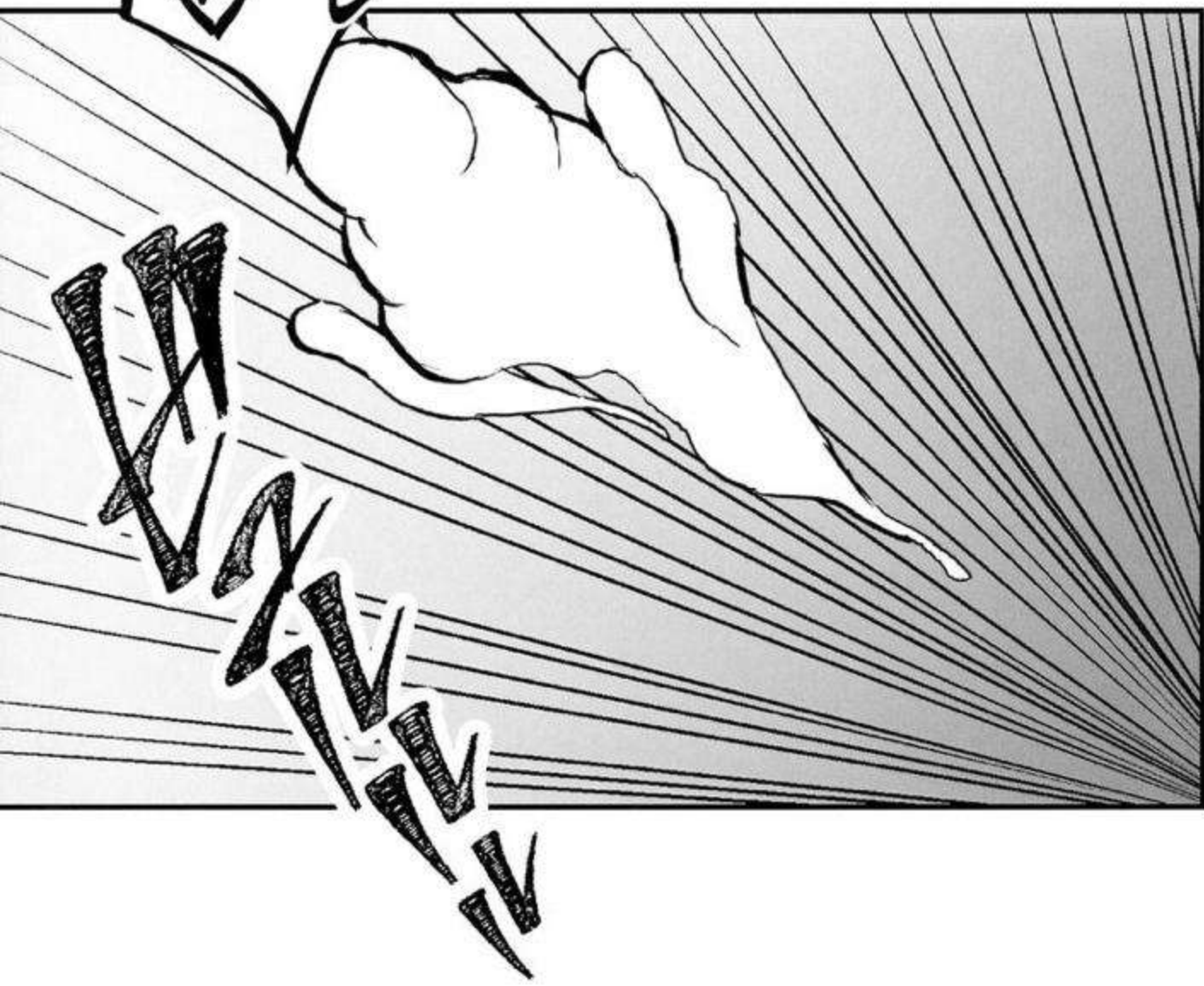
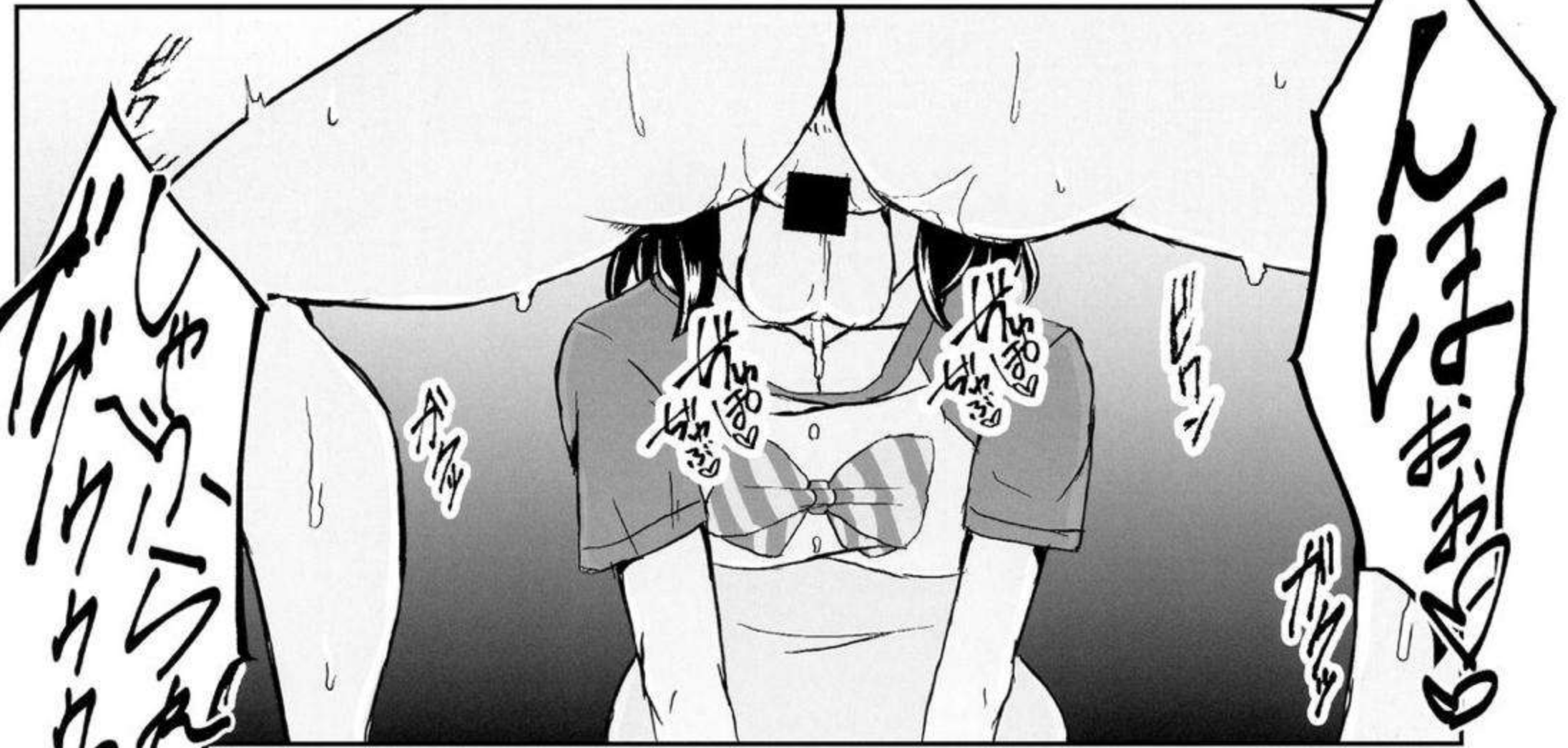
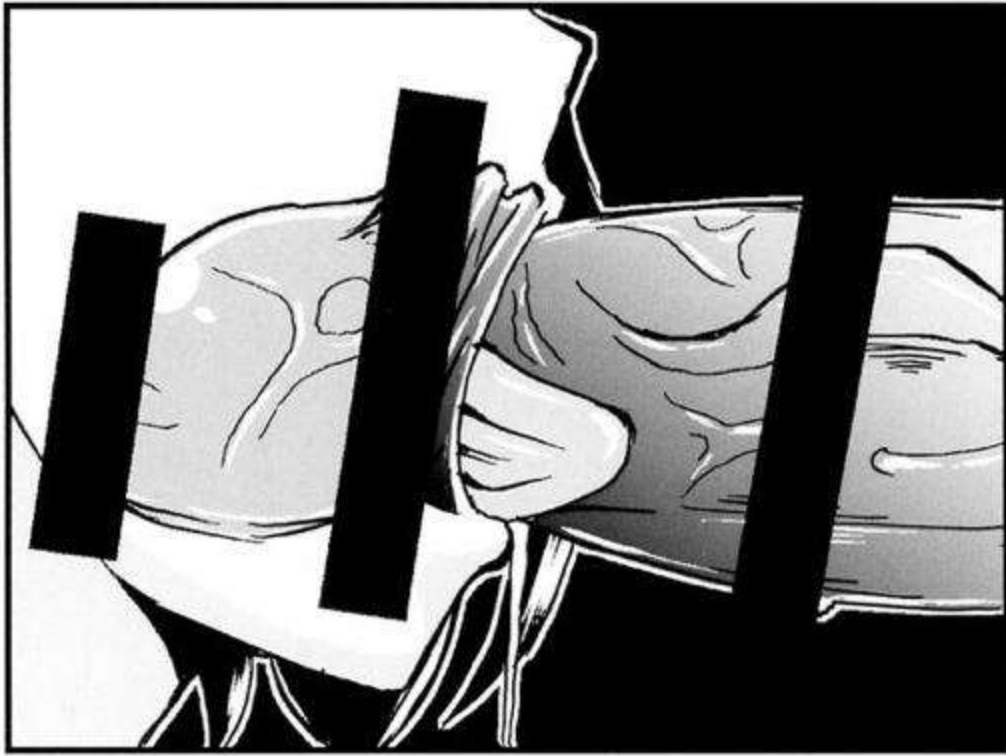
だんっ...  
ダメだよ未来う...

今まで隠して  
未来に見つかって  
しまったのだから!

♡ひびみくふたなりエッチ♡

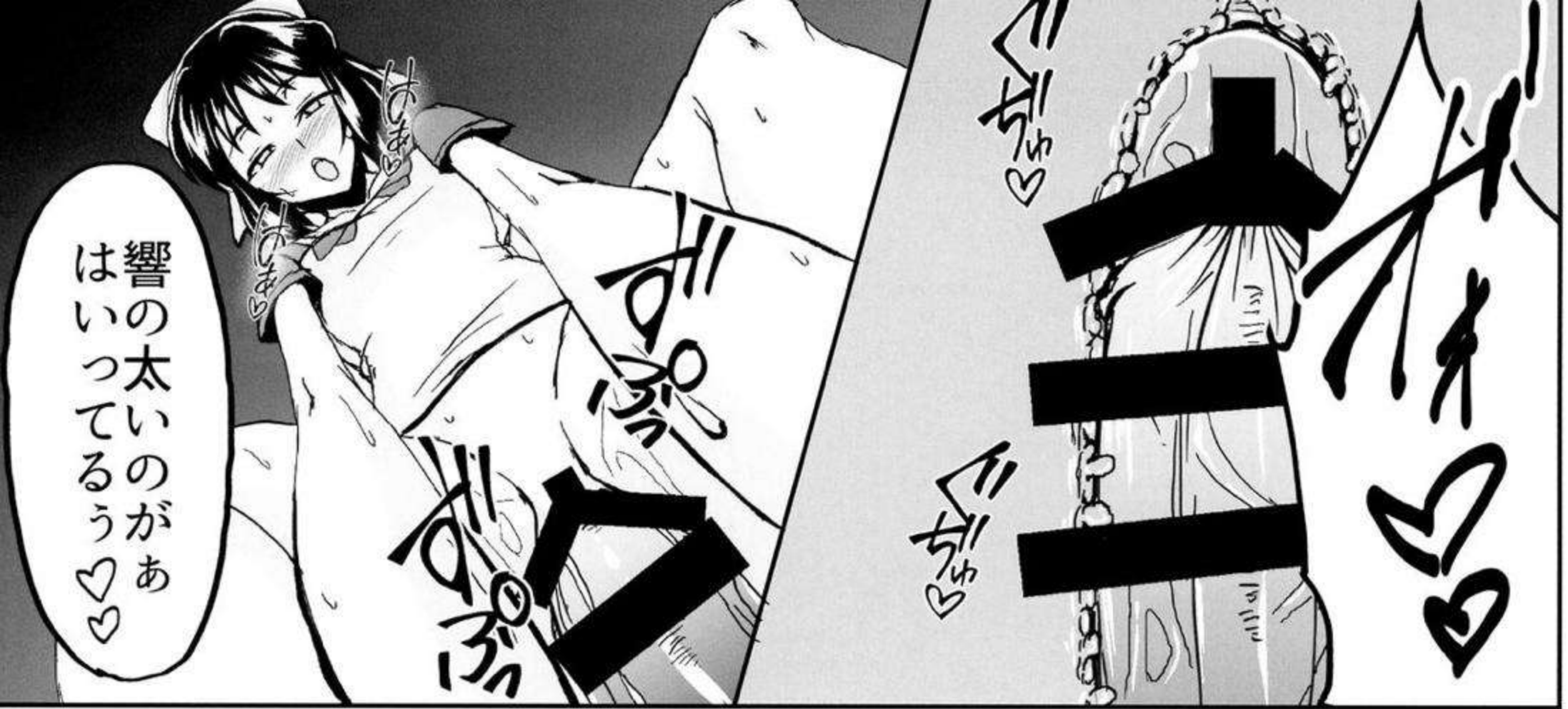
文影











響の太いのがあ  
はいつてるう♡♡



きもちよすぎてえ♡  
チカチカすりゆうう♡

私の中で  
すごいビクビクしてるう♡



あがががが♡♡

あがががが♡♡







花

グウウウウ

はははー  
おなかすいたねえ

未来のご飯が  
食べたーい

終わり

## 神様の悪戯

すみつ

ある日の夜。私、小日向未来は、不思議な夢を見た。どこまでも暖かい、不思議で明るい空間。その中に、一つの影が見える。逆光で顔が確認できず、誰だか分からないけれど、どこか懐かしいような雰囲気だ。

「久しぶりだな、我が依り代よ。……いや、元依り代、と言った方が正しいか？」

その人は、唐突に私に話しかけてきた。どうやら、私の事を知っているらしいが、思い当たる節が——あった。

「ええつと、もしかして、神様の……」

名前を思い出そうと躍起になっている私に構わずに、これまた唐突に話題を変えてくる。

「ところで……お前がいつも一緒に居る、大切に好きだと言っていた人間とは、あれからどうなっている？」

「響のこと……ですよ？　ちゃんと自分の想いを伝えて、仲良くできていますか？」

「それはなにより……と言いたところだが、お前が望んでいたのは、そういうことではないのではないか？」

どきり。別に言ったことに嘘はないのだけれど、その一言は、私の心の内に隠してある誰にも打ち明けていない、響に対する『本当の気持ち』を指しているのだろう。

でも、それを容易に認めることはできない。いくら神様の言葉であっても、私は響を——親友を困らせることは、したくないから。

「ふむ……心の隙を見せて我に身体を預けたあの頃と違い、お前も成長した、ということか。とはいえ、このまま頓着し続けているのも、もどかしいものよな。少しだけ手を出させて貰うとしよう」

「え？　な、なにをです？」

「立花響を、自分のものにしたとは思わないのか？」

それは、私にとって悪魔の囁きだった。神様に対して悪魔、なんていうのは失礼だったかもしれないけれど。

「でも、そんなこと、どうやって……それに、無理矢理響の気持ちを変える、なんてこと、私は望んでないです」

「なあに、暇を持って余した神々の遊び、みたいなものよ。仲良くなれるとよいな」

そう言った直後、私の意識はブラックアウト——次に目を覚ました時には、見慣れた天井が広がっていて。カーテンの隙間から漏れる朝日が眩しい。

なんだか長い夢を見ていた気がしたけれど、不思議と気分は高揚している。

「さて、学校行く準備しなきゃ」

そう言いながら、今日の授業で使う教科書を詰める為にまずカレンダーと時間割を見ようとしたけれど、そこ

で気付く。今日は土曜日——つまり、学校は休みだった。

どうやら、私もまだ寝ぼけているみたいだ、と心の中で苦笑しながら、親友の隣に寝転がる。さて、予定外に早起きしてしまったけれど、この後どうしよう？

「……たまにはいいよね」

そう呟きながら、私は再度目を閉じる。二度寝なんて滅多にしないから眠れるか不安だったけれど、意外にも早く意識を手放すことができた。

◇

◆

◇

「な、ナニコレ……一体どういうこと……？」

土曜日だからと惰眠を貪っていた私。だけど、朝方何故だか目が覚めてしまったので、トイレに行った。ここまでは別に誰にでもあることだろうけれど、今の私にとっては非常事態だ。なんせ、いつものようにパジャマを、下着を脱いで用を足そうとしたら、女の私にあるはずのないものがあつたのだから。

「えーつと……こ、これって、男の人の……だよな？」

保健の授業とか、そういうのでしかみたことないそれが、確かに自分の下半身に存在している。信じられないけれど、あるものはあるのだから仕方ない。

「いやいや、仕方なくても、これどうすればいいの!!」

どうみても自分から生えているけれど、本当なのか……それを確かめるためにそつと触れてみる。

「あつ……」

確かに、触れている感覚がある。それ自体が持つ熱も、自分の手を通じて伝わってくるのが分かる。芯が入ったように固くなっている肉棒の感触を確かめるように、恐る恐る手の平でなぞっていく。

「うあ!! 背中が、ぞわぞわする……!!」

その感触が、なんだがもどかしいような、むず痒いような……今まで経験したことない感覚で。

(どうしよう、止まらない……!)

世の中、イケナイ薬とかにハマってしまう人って、よもやこんな感じでハマっていつてしまうのだろうか。残った理性でそんなことを考えていたけれど……やがて、自分の中で『何か』が出口を求めて爆発しそうな感覚に襲われる。下半身に集まっていくその感覚に抗う術なんて、おバカな私が持ち合わせている訳がなくて。

「あつ、うう……!!」

触れていた肉棒がドクン、と脈打つと同時に、先端から白濁した粘液が吐き出されていく。しばらくの間続き、目の前のドアを汚していく様を呆けた顔で眺めることしかできずにいた。

ようやく収まったけど、私はしばらく放心していた。

荒い息を整えながら現状を把握しようと努めるけれど、  
一体何が起きたのかさっぱり分からない。

「と、とりあえず……このままじゃ絶対マズイ、よね!!」  
バケツと雑巾をダッシュで取ってきた私は、大慌てで  
掃除を始めるのだった。

◇

◆

◇

掃除が終わった頃には、既に時刻は十時を回っていた。  
自分の身に起こった謎の現象を隠したいという思いが  
そうさせるのか、はたまた寝ている未来を起こさないよ  
うに、という思いからなのか……あるいは、その両方か。  
平日でなかったことと、未来が休日とはいえまだ起きて  
なかったことを感謝しつつ、忍び足で部屋に戻る。

「あ、響……おはよう」

「お、おはよう！ 未来！」

流石にこんな時間だからか、未来が起きていた。むしろ、  
普段の生活から考えると、起きてなかったことの方が  
おかしいくらいだ。

既に私服に着替えていた未来は「ちよつと遅くなっちゃ  
ったけど、朝ご飯作ってくるから響も早く着替えてく  
るんだよ」と言っただけで台所に向かっていた。

正直、この状況でどうやって着替えようかと密かに悩

んでいたもので、ありがたい。

下半身のモノの存在が少しでも隠せるよう、ゆとりの  
あるサイズの服を選んで着替えたなら、台所に向かう。

ご飯と冷凍食品の唐揚げだけという簡単メニューだけ  
ど、この時間でもすぐに食べられるし、なにより未来が  
用意してくれたものだからという単純な理由でいつも通  
り美味しく頂いて、今日の予定について話し合う。

「天気いいけど、どこか出かける？」

「え、ええつと……今日はその、ゆっくりしたいかも！  
昨日も訓練キツかったし」

半分本当で、半分は嘘だ。訓練がキツかったのは本当  
だけど、今の自分の身体のことを下手なことでバレてし  
まわないよう、外出は控えたいから。

「そう？ 響がそう言うなら……でも、実は私もちよつと  
疲れてるからゆっくり休む日にしようかな？」

「ふえ？ 未来、どうかしたの……？」

「んー、大したことじゃないんだけど、昨日変な夢を見  
ちゃって、ちゃんと眠れた気がしなくて」

「変な夢……？」

「うん、内容はよく覚えてないんだけど、神様が出てき  
て、私と響の事で何か言ってた気がするんだけど……」

「それって……」

今の自分の状況、もしかして未来の見た夢が関係して

いたりするのかも……なんて、そんなアニメみたいな話がある訳がない。内容もあまり覚えてないって言うし……とはいえ、現状今の私の身体がこうなった原因について、思い当たる節となりえるのは未来が見た夢くらいだ。とりあえず、現状は特に大きな問題は起きてない。バレさえしなければ、普通に生活できるのだから……原因を考えるのは後回しにして、これから先どうしていくかを考えるのが先行だろう。

「よし！ それじゃあ、今日は一緒にゆっくり休もう！」

「うん。たまには一日部屋の中で過ごすのもいいよね」

この選択が、後に大きな間違いだったということに、今の私は知る由もなかった。

室内で過ごすなんて言っても、二人でやることなんてやっぱり限られているもので。一通りの家事を終わらせてしまうと、途端にやることはなくなってしまう。

映画を見ようにも、DVDを借りるならば結局は外出しなければならぬ。そうになると、今の学生が持っている最大のコンテンツと言えばスマートフォンで。

一緒に動画を見たり、ゲームをしたり……それだって、ずっとやっているのと飽きはせずとも、疲れてくるものだ。

「同じとこでずっと失敗してるくなんで!!」

「響、ちよつと休憩しよう？ 焦っちゃってるから、休憩して落ち着こうね」

「うん、そうする……ちよつと漫画でも読もうかなあ」「結局スマホは見るんだね……」

ゲームをやめ、手頃な漫画サイトを開く。しかし……

「んん!!」

「響、どうしたの？」

「あ、いや、最近の広告って過激だなあって思って……」

小さい子供も見そうな漫画サイトだろうに、サイトの隅の方だとか、突然現れる広告が、いわゆる大事な部分は隠されているとはいえ、なんとも刺激的なものが多くて、思わず二度見してしまう。普段なら気にならないですぐさま目的の漫画のページへ飛んでいってしまうのだけれど、今日に限ってはやたらと目についてしまう。

「たしかに……わざわざ自分で消さなきゃいつまでもしつこく表示されるのもあったりして、ちよつと迷惑って思っちゃう時もあるよね」

「迷惑……そ、そうだよねえ！」

「でも、私ちよつと意外だなあって思っちゃった」

「……へ？」

「だって、響ってそういうの、そんな興味ないのかと思ってたからさ」

「い、いやまあ、特段興味はないけど……でも、急に出

てきたからびっくりしちやったというか」

嘘だ。今は少しだけ気になっている。でも、流石にそういうことを堂々と言うのはいけない気がする。

焦って言い訳している様は何ともカッコ悪い……でも、よく見ると、未来の方もなぜか顔を赤くしていて。

「びっくりした、と言え……私もちよっとびっくりしていることがあるんだよね」

そう言いながら、私から視線を外す——いや、外した訳ではない。未来は一貫して私を見ている。ただ、見ている場所が変わっただけで。

果たして、その視線の先は——

「……あつ」

私の下半身。ゆったりしたデザインのズボンを選んだ筈だったけれど、そんなことなどお構いなしに、私のズボンの股間のあたりが不自然に膨らんでいた。

「わああ!! 未来、こ、これは、えっと、その……」

「えっと……どうしたの、それ」

「えっと、私もその、今朝突然こうなってたからよく分からなくて……と、とにかくごめん!」

完全に油断していた。えっちな絵を見たりすると、こうなるものだと保健の教科書にも書いてあった筈だ。

とにかく、未来にバレてしまった以上は隠してはおけない。でも、未来に見られたまま、というのもこちらと

しては気まずい。となると……。

「ちよ、ちよっとトイレ行ってくる!」

朝の時と同じようにやれば収まるかも、と思った私は、急いでトイレに行こうと立ち上がったけれど、直後に未来に腕を捕まれて。

「待って、響! その、響さえよければ……」

最後の方が聞き取れなくて「未来?」と聞き返す。

「響さえよければ、私がどうにかしてあげたいって思うんだけど……だめ、かな?」

その言葉を聞いた瞬間。私の下半身に熱が集まっていたのを確かに感じた。

◇

◆

◇

どうにかしてあげたい——そんな未来の言葉を信じて、その身を任せることにしたけれど。

チャックをおろすと、下着を痛いくらいに押し上げているものが目に入る。少しだけ下着をずらすと、勢いよく肉棒が飛び出してきた。未来は、それをしばらく見つめた後、恐る恐るといった具合で触れてきた。

「……ッ!」

「あ、響……もしかして痛かった?」

「へ、平気だよ。人に触られるの初めてで、少しビク

りしただけ。……それより未来、気持ち悪くないの？」

「大好きな響だもん。気持ち悪いなんて思わないよ？」

……痛かったら、いつでも言ってる？」

言いながら、感触を確かめるように撫でまわしていく。

未来が触っている、というだけで、自分で触っていた時と全然違った感覚だ。いつの間にか、私の肉棒ははちきれんばかりの大きさに膨張していた。

「響……さつきよりすごい大きくなってる」

「未来に触られてると、なんか……際限がないみたい」

「えつと、こういう時は確か……」

未来がそう呟いた直後。突然、先端の方が生暖かい感覚に包まれた。

「ちよ、未来……口になんて、汚いよ！」

制止しようとする私を無視して、更に奥まで啜え込んでいく。未来の口の中が、気持ちよくて何も考えられなくなつて……制止するために伸ばした手は、未来の頭に添えられる形で止まってしまった。

慣れない、ぎこちない動きだけれど、それがかえって刺激を増幅させている。時折じゆるじゆると聞こえる淫猥な音も、愛おしそうに私の肉棒を見つめる未来の視線も、全部が全部、快感に変わっていく。

「うあ……！ 未来、もう、私……ッ！」

下半身に集まった熱が、爆発しそうだ。そんな私の状

態を察してくれたのか、未来はより深くまで啜え込んで、強く吸い上げて……限界を迎えた私は……そのまま未来の啜内に熱を吐き出した。

「う、くう……！」

「んん……っ！」

ドクドクと脈打ちながら放たれる白濁を、未来は受け止めようとしてくれたけど、やっぱり受け止めきれなかったよう……口の端から漏れてしまっていた。

「ごめん、未来！ 大丈夫!!」

すぐにティッシュで口の端を拭いてあげる。啜内に残っているものもそこに吐き出すようにと更にティッシュを追加しようとした直後。ゴクン、と咀嚼音が聞こえた。

「未来、まさか……」

「ん、ちよつと苦いね……」

そう言いながらも、嬉しそうに笑っている未来。

「だ、大丈夫なの？」

「毒じゃないらしいから心配しないで？ それより……」

まだ、収まらないみたいだね」

「あ……」

朝の時は、一回出したら収まったのに。今は何故か元気なままだ。一体どうすればいいのだろうか。

「で、でも、これ以上未来に無理は……！」

未来にシてもらって、すごく気持ちよかった。でも、

私ばかりでは未来に申し訳ない。この時ばかりは、知識が伴っていない自分を恨めしく思ってしまう。

「だったら、響のそれで、私もシてほしい、な……」

「へ？　ど、どうやって……？」

未来は私の問いかけに応えず、おもむろに服を脱ぎだす。あつという間に下着も脱いで……一緒に風呂に何度も入っていて見慣れたはずの未来の裸。それに、何故か釘付けになってしまふ。

「シている側も、結構感じちやったりするんだよ……」

「そ、そういうもの……なの？」

今まで見たことない表情でそんなこと言われるから、ドキリとしてしまふ。

「そ、それで、どうすればいいのかな……」

「えっと、それは……私も性行為なんて初めてで上手くできないかもしれないけど……」

性行為、と言われて、これからすることをようやく理解する。我ながら鈍感すぎる……つまりは、私のこの男性器を、未来の女性器に入れてってやつだ。

「って、性行為って、子供作るってやつじゃ!!」

「そうだけど……響のそれ、子供作れるように機能してるのか分からないし、それに響が嫌ならいいんだよ」

「未来が嫌なんて、そんなことあるわけないよ！　それに未来の事、信じてるから大丈夫！」

「響……ありがとう」

「なんだか順序が逆になっちゃったね……でも、今の気持ちは本当だよ？　今更だけど、私、未来の事が……」

「分かってる」

その先は、もう言葉はいらないとばかりに未来が私の唇を塞いできた。私もそれに応えるように、抱きしめる。どちらからともなく舌を絡ませるけれど、やつぱり初めてだから上手くいかない。でも、そんな稚拙な感じだった、今は愛おしく感じる。

「未来、私、その……」

「うん」

未来は私をそつと押し倒すと、硬くなった私のモノを握り、自身の性器に導いていく。

先端が触れるのが感じた。次いで、ぬるり、と生暖かい感触。未来も感じていた、というのは本当だったんだな、なんて思いながらも、先端から段々と埋まっていくにつれて広がる感覚・快感に頭が痺れるような感覚に陥ってくる。

「未来の中、すごい、熱いね……」

「ん……響のだって、熱いよ……？」

ゆっくりと腰を落として、自身の体内に私の肉棒を受け入れていく。そういえば、初めては痛みが強いつて聞くけど、大丈夫なのかな、と未来の方を見やると……や



はり、苦痛を感じているのか、その表情には余裕がない。

「未来、無理しないで……！」

「ありがとう、響。でも大丈夫だよ……痛いけど、痛いのだって、大好きな響なんだもん。だから、平気」

最後は体重をかけて、一気にねじ込んでいく。

「うあ……！」

「ん、は、入った……！」

今、全部が未来の中に入っている。温かくて、ぎゅうぎゅう締め付けて、絶えず刺激が与えられている状態。気を抜くと早くも出そうになりそうなくらいだ。けれど、まだ入ただけじゃないか、とグツと堪える。

そのまま動かさずしばらく落ち着かせた後に、未来がゆっくりと腰を上げて、再度下げて、私の肉棒を自身の中に少しずつなじませていく。ズルズルと肉と肉が擦れ合う度に、全身が痺れるような快感が湧き上がってくる。

「あ、ああ！ ひびき、ひびきい！」

「未来……！」

段々と慣れてきたのか、腰の上下運動もスムーズになつてきた。狙ってやっているのか分からないけれど、その緩急をつけた動きは、私の理性をどんどん削いでいく。

「うあ、みく、私……気持ち良すぎて……！」

「ああ、ひびき、私、も、気持ちいい、よお！」

無意識のうちに、私も未来の動きに合わせて下から突

き上げるように腰を動かしていた。未来が腰を落とす動きに合わせて私も突いて、未来の最奥まで犯していくと、未来の顔が快樂に歪んでいく。

「そこ、いい……響……！」

「奥がいいんだね、未来……！」

段々と勝手が分かってきた私は、上半身を起き上げながら、未来の腰を掴んで動きをサポートする形で、更に動きを加速させていく。

私と、未来と。二人の嬌声が室内に響き渡る。

荒い吐息。未来の匂い。抱き合う感触、繋がっている感覚、互いの表情——五感の全てが快樂となって、私はもう、未来の事以外何も考えられなくなっていく。きつと未来も同じだ。

「ひび、き……私、もう、おかしくなりそう、なの……！」

「未来ッ……私も、一緒だよ……もう、未来の中でいつ

爆発しちゃうか、わかんない……！」

「いい、よ……ひびき、ちようだい？」

「んっ……未来、みく！」

最後のスパートをかけるかのように、更に動きを深く、早くしていくと、未来の悲鳴のような嬌声が耳元で聞こえてくる。

「ひびき……ひびきいいい！！」

「みく……っ！」

最奥を突いた瞬間、未来の体内が強く収縮して、私の肉棒を締め付けてくる。まるで搾り取られるかのようなその動きに、私も我慢できずに自身の欲望を未来の中に吐き出していく。

その間も、私の背に腕を回して、決して離れないようにとしがみつくと未来。その姿を見て、私も絶対離すものと強く抱き締める。

長い射精感が終わったと同時に、二人して脱力。でも、こんな所で寝たら身体が痛くなってしまふから、最後の力を振り絞り、なんとか未来を抱えてベッドへ倒れ込む。

すぐに瞼が重くなって、意識もフェードアウト。

でも完全に意識が落ちる前に、ちゃんと伝えないと。

「未来、ありがとう。だいす……」

言い終える前に、私は眠りに落ちてしまったのだった。



響と一つになったその日の夜、私は夢を見た。

ふわふわした感覚、どこまでも広がる空間。その中に、一人の人物が立っているのが見えた。

「あ、あなたはこの間の……神様！」

「どうやら、無事に仲良くなれたようだな？」

その言葉で、響の身体に起こった謎現象は、やはりこ

の神様の仕業だということ把握する。

「その、ありがとうございます。こういう形であれ、きっかけになったのは間違いなかったのよ」

「お互い好んでいるのが分かっているけど、言葉にできない。時に言葉だけでも伝えきれず、行動も伴わなければならぬとは……なかなかどうして、人間というのはもどかしいものよ」

「それを言われてしまうと……でも、そうやって互いを理解して、想いを通じ合わせて……お互いがかけがえのない存在になっていくのが人間だと、私は思います」

「……ならば、それから先を見守らせて貰おう」

そう言って、神様は消えてしまい、同時に私の意識も、ブラックアウト——次に目を覚ました時には、見慣れた天井、カーテンから差し込む朝日。前の時と同じだ。

でも、一つだけ違う事があった。

隣で眠る、愛しい親友<sup>こいびと</sup>。その寝顔は、とても幸せそう

で、見ているこっちも幸せになる。

起こさないように、額にそっと口づけて、一言。

「響、大好き……うん。愛してる、よ」



Suika



未来ー！  
ただいまー

ぽんぽん



「おかえり♡」  
白兔 かなか

響  
おかえり



ムンムン...

ん？  
どしたの未来



響：  
これ苦しいの  
助けてくれると  
うれしいなあ…♡

かあああああ  
うんうん

ありあり

わっ…わかった…？  
助けてあげるね  
未来！

響♡

じゃあ  
まずお口で  
頑張ってみて♡

えっと  
お邪魔します…

もよもよ

んっ  
うん！

あ〜ん

ん…♡

わっわっわっわ  
わっわっわっわ



そんな感じで  
助けて...♡

ニクニク



気持ちいいよ♡  
ひびきい

ニクニク♡  
ヒュー♡



響のくちの中…  
熱くって凄くって  
射精ちやうツ♥

じゅぽっ

じゅ

る

ムン  
ムン  
ムン

ムン  
ムン  
ムン



ごめん——響…  
強くしすぎちゃった  
かも…

今度は  
響も

気持ちよく  
してあげるね…♥

みツ…未来!?

ポーン





ちよつと  
待って未来……ッ

それじゃ……  
挿入ちやうね  
響のナカ……♡



熱っ……  
これじゃすぐに  
イっちゃうかも……♡



ひッ…  
響のなかに  
射精ちやうッ♡



いきなりだったけれど…  
凄く気持ちいい♡

このまま  
毎日続いちやったら  
どうしよう…♡



Illustration :  
まきびけいし

※いつもの二段  
ベッド二階です

風邪ひいて甘えんぼぶつうです

しゅわん♡  
しゅわん♡  
しゅわん♡

みくのなが  
あったかいん  
だろうなあ

バカ

どたばたで  
風邪を  
ひいてしまった  
未来さん

発熱いでに  
ついでに  
発情して  
できたよう  
です

んんん♡

未来のえっちら

えっちら  
じゃないもん...

ぜん♡

私は馬鹿だから  
風邪ひかない  
けれど  
悪化しちゃう  
よおろし?

いつもより  
しつとりしてて  
大人しい感じ  
がする



わっ  
未来、うえに  
なっ♡  
かばっ

おっ

あ...

すっ



みく専用  
注射器  
あーっ

小さいころは  
ウインナー  
みたいだった  
の...

あーっ  
あーっ

あーっ



あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ



あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ  
あーっ

あーっ  
あーっ

未来ー♡  
お注射  
しゅっが♡

しゅっが♡

しゅっが♡

しゅっが♡

しゅっが♡

しゅっが♡

おちゃんちゃん  
かきうしゅ  
せきかいね♡

おちゃんちゃん  
かきうしゅ  
せきかいね♡

未来は  
すっかり  
おちゃんちゃん  
おきいね♡

おちゃんちゃん  
かきうしゅ  
せきかいね♡

おちゃんちゃん

おちゃんちゃん  
かきうしゅ  
せきかいね♡

おちゃんちゃん  
かきうしゅ  
せきかいね♡

おちゃんちゃん♡

おちゃんちゃん

あーん ちゅんちゅんちゅんー♡

あーん♡  
ちゅんちゅんちゅんちゅん♡

響、アッ♡  
ちゅん♡

風邪だから  
運動？

未来は  
えっちな子  
だなあ♡

ちゅん♡

あーん♡

ちゅん♡

高速  
ピストニー♡

キスハメ  
好きなの  
可愛い♡  
未来、好き♡

ちゅん♡  
ちゅん♡





未来の好きが  
体位が増えて  
うれしいよ♡

おんおんおんおん

可愛い子  
作るうね  
みくー♡

♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡

好き♡

♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡

まだ♡  
お♡  
♡♡♡♡♡

♡♡♡

あ♡♡

キャッ  
うたふさふさ  
未来♡!!

♡♡

♡♡♡

♡♡

♡♡

翌日仲良く  
風邪を  
ひきました♡

射精すよー!

♡♡♡

♡♡♡

それは甘くて蕩ける

終 翔

そうそれは、長い長い戦いが終えた後突如と訪れた身体  
の異変、戦いのさなか自身は捕らわれの身となりあまつさ  
え一時的とはいえ支配を許すなど言う二度と起こらないで  
あろうし、経験したくもない事件の解決後であった。

「ん、んう……なんか身体が……」

朝、日が昇るころに小日向未来は目が覚め身体を起して  
すぐに気が付いた、何か体がおかしいのでは？と。

毎日のように同居している立花響の体調管理について口  
を酸っぱくして、耳にタコができるほど注意をしている自  
分が何もないこんな日に体調を崩した？と少しげんな表  
情をしながらベッドから抜け出し身支度をしようとして姿  
見の前に立つと……

「な、な、な、ナニコレ！」

思わず近所迷惑も考えず叫んでしまった、ハツとして思  
わず口を押えるが同居人は微塵も起きる気配を見せずお腹  
をほっぽり出して夢の中である。

「えつと、これって……」

十人に聞けば十人が大声を上げるだろう、いや何人かは  
余りのショックで声も出せぬ気絶も考えられるかもしれな  
い、それもそうだろう今日の前に映る姿を常識的に考えて  
受け止めて冷静になれるほうが異端であろう。

「彼女の下腹部にそれはそれ立派に屹立した逸物が見え  
ているのだから……」

彼女のパジャマを押しつけそり立つそれは知識として  
はもちろん知っている、知ってはいるが現物を見たことな  
どあるわけもない。さらに言えばそれが自身の一部だなん  
て思うわけもなく。

「……どうしよう。これ」

姿見の前で呆然と眺めている、夢なら冷めてほしいと願  
ったがあいにくその願いはあまりにも儚くそんなことはな  
いのだと自分自身が一番よくわかっていた。軽い現実逃避  
を仕掛けたがそんな自分を強く律して現実と向き合い自身  
の一部となった屹立に興味本位で触れてみた。

「……ビクン！」

自分の体を触った、ただそれだけなのにその感覚は今ま  
でに感じたことのない異質なものを脳に伝えた、さらには  
その何気ない行為はこの後に続く愉悦へのスイッチになる  
ことを彼女は知る由もなかった。

「と、とりあえず着替えなきや！」

しびれるような感覚に我を忘れ姿見を見ればおおよそ少女  
がするには危ない表情に陥った自分の顔を見て慌てて身支  
度を整え始めるのであった。

着替えの途中も違和感しかなく、下着を着替える際の衣擦れ一つが未知であい事あるごとに呻きにも似た声をあげながら着替え一つで妙なけだるさを覚えてしまった。

「着替えるだけでこんなに疲れるなんて……」

頭の整理をしたいところだが考えても解決しそうにないことが容易にわかるためまずはいつもと同じ行動をして落ち着くことにした。

慣れ親しんだことをすれば次第に頭も回るだろうし何かしらい案が浮かぶだろうと楽観的に考え朝の支度を始めた、そしていつもの行動がいつも通りにできないことが気が付き始める。

「響、そろそろ起きないと」

朝食の支度を終えてようやく頭が回り始め一先ず響を起そうと彼女の寝床へと近づく、相変わらずいい寝相とはいえず布団ははねのけパジャマはもはや来ているのかどうか怪しい状態であった。

いつもならため息交じりにその光景を見ながら響を揺り起こしたりするのだが今日はなぜかその行動に移ろうという考えがなかなか頭に浮かばず、開けた響のパジャマから覗くその肌から視線が動かさず生唾を飲み込み立ち尽くしていた。

「あ、あれなんでだろう……」

自身の状態に理解が追いつかず見慣れた光景なはずが、

まるで見てはいけないものを見ているような感覚に捕らわれ、朝の身支度を終え朝食の準備の合間に落ち着いた逸物がゆっくりと鎌首をもたげ始めていた。

「ひ、響！早く起きて！」

自身の体の変化に気が付いた未来はいち早くこの状況を終わらせるために響きを起そうとした、だが相変わらず夢見心地の響はお約束の寝言を言いながら抵抗を続け未来は体を揺り動かす手を引かれ布団へと引き込まれてしまった。引き込まれたが最後、抱き枕のように抱き着かれ身動きが取れなくなっていた。

「きやつ……！」

ちいさな悲鳴と共に眼前に響の寝顔が迫る、仲の良すぎると噂される二人なのだからそれくらい距離感はいいつも通り……だと自分でも思っていたがなぜか今日は動悸が治まらず体が妙に火照る感じがした、そう何より下着からはみ出た逸物が痛いぐらいに震えてそれがまた未来の思考を麻痺させていくのであった。

抱き着かれた未来は何か逃げようともがいては見ることができかなわない相手の羽交い絞めに抗えるわけもない、さらには先ほどから下腹部からくる刺激に思考が奪われ抜け出す力が入らなくなってきた。

密着した状態でもがくものだから屹立した逸物は自身のスカートと響の体でこすれ甘い刺激を脳へと伝えていた。

それは凶らずとも自慰行為と相違ない動きとなり未来は  
少しづつその快感に身を委ねてしまっていたのである。

「ひっ、ひびきい……」

上ずる声は最早相手を起す呼びかけとは呼べずただ名前  
を呼ぶことで己の快感を増加させるスパイスと化しており、  
もがく動きも抜け出そうとする様子も見受けられず自身が  
最も快感を得られるであろう動きを模索していた。

「んっ！！！」

慣れない快感の波にそう長く耐えられるわけもなくこす  
りつけた逸物は限界を迎え、奥底で眠っていた熱い欲望が  
スカートの内側を濡らしてしまふ。

「ふあ……なに、これ……」

響きを起すことを忘れ捕まったことを言い訳に自らの快  
感に溺れその果てに自身もろとも汚すことになろうとは、  
最早正常な思考ができない状態でも良くないことをしてし  
まったという罪悪感がある、だがしかしそれよりも射精に  
よる快感が脳内を支配しているのだろう、一度果てたくら  
いでは収まらない逸物を自身で汚したスカート越しに未だ  
擦り続けていた。

「ダメ、何も考えられない……」

こんなことをしてこの後どうやって響に声をかけられるの

だろうか、いやそもそも話しかける事すらできる気がしな  
くなりつつある。

自身に起きた身体の変化、さらには起そうして布団に潜  
り込み言い訳のできない自慰行為、自ら出した白濁液がス  
カートを濡らしている。それは暖かく、嗅いだ事のないよ  
うな匂いと慣れていた響から発せられる匂いで頭はぼーっ  
としてしまいこの快感にのめりこみつたつある。

「まだ、起きない……よね」

寝起きの悪い響の事は熟知していた無理やり起こそうと  
毎日格闘しているのである、ちよつとやそつとじゃ起きな  
いことは確信している。いつの間にか、いや元からもし  
れない、自身を捕まえていた響の力が緩んでいて容易にそ  
こから抜け出せるようになっていた。

「(もつと、したい……)」

ふわふわとした頭を必死に揺り動かし考え付いたことが  
まともなわけもなく、覚えてたの快樂におぼれた一人の墮  
落者が出した考えは……

「響のお口……」

今しがた得た初めての射精という感覚、それは本来なら  
ば生涯得る事ができるわけでもないものである、だが今日目  
覚めて起きた時自身にもたらした身体の変化はそれを可能  
にした。

知識だけのモノがいざ自分に起きた時誰しもその事象に

心奪われてしまうであろう。今まさにその状態に陥った未来に好意を止めるなどという選択肢はなかった。

気が付けば着替えた服を脱ぎ捨て一度欲望を解き放った逸物はまだまだその中に欲望を蓄えており、今なお猛り狂いそそり立っていた。

「はああ……」

ゆつくりと響の顔の上に立つとゆつくりと腰を下ろし響の口へとその逸物をねじ込んだ。

「ああ、ああ！！響のお口の中温かい……動かしたらダメかな？いいよね響？」

無理やりねじ込んだ逸物は響の口内にゆつくりと飲み込まれすつぽりと包まれる、先ほどまでこすりつけていた感覚とはまた違いねつとりと包み込まれるような感覚に思わず感嘆の音が漏れる、そのままでも気持ちいいのだが先ほどに比べ刺激が足りず自然と腰が動き始める。

「ングウ……」

口に異物を押し込まれたにも関わらず起きる気配を見せない響はアイスか何かでも入れられたかと思っただのか口内に侵入した逸物を舐め始める。

「ひゃん！起きて……ないよね？でも気持ちいい……」

響の突然に行動にドキリとしたが目覚めるわけでもなく未来の逸物を夢中でしゃぶり続ける。

「だめ、そんなの我慢できない、でちゃう！」

こみ上げる射精感を必死に我慢しているがそれも響の舌に逸物が触れるたびにどんどんと限界が近くなる、覚えたての感覚に抗うずべは少ない、そして加減もわからず刺激を与え続けた逸物は最早決壊寸前のダムそのものである。

声にならない声を上げて未来は響の口内に盛大に欲望をぶちまける。

「ンエツ！ゴホツ！」

さすがの響も口の中に出された異物をそのまま嚥下することはできずそれらを吐き出そうとしてゆつくりと覚醒する。

それを悟った未来は大慌てで浴室へと逃げ込んだ、欲望を吐き出しその快感に身を委ねようとしたが響の咽る声で己の今の姿に気づき響の上から逃げ出した。

浴室に鍵をかけ床に座り込む未来。

今考えているのは響への言い訳、許されない事をしたと震えているが、その逸物は萎えることなく次の快樂の時を待ちわびるように佇んでいた、未来自身も震えながらもその表情は蕩けるようであった。

（完）

## なかなおりの写真

ZET

「ただいまーッ！」  
二人は同時に寮の部屋に入る。長い一日がようやく終わった気がして、揃ってため息をついた。

「はー疲れたよーお腹すいたよー」  
響は制服のまま床に寝転がって大の字になる。ノイズに襲われている未来を助けたのがついさっきのこと。そして互いに胸の内を吐き出し合ったときに響は気付いた。

……未来はこんなに大事な人なんだっていうのを。仲直りすると、前よりもさらに仲良くなれんだっていうことを。

仰向けで逆さに映る未来を見ていると、彼女はそんな自分のだらしないさに笑いながら、

「何も準備してないし出前でもとる？」

「さんせーッ！ 何食べようかなー」

ごろりとうつ伏せになって、よじよじ這いながらテーブルへ向かう。

手についてよっこらせと身を起こし、未来が広げたメニューの中から今の気分合うものはなんだろうかと一緒に探す。

「未来は何食べたい？」

「響が食べたいのいいよ」

「えー、あたしも未来が食べたいのがいいよ」

といういつものやりとりをしつつ、最終的にファミリーレストランのパーティーセットを頼むことにした。

「三十分くらいかかるって」

「はーい。それじゃあお風呂入っちゃおっか」

帰る途中、遠隔タイマーであらかじめセットしておいたおかげで、浴

槽にはすでに湯が張られている。響は立ち上がり制服の上着とスカートをハンガーにかけ、未来も同じようにするのを横目に先に脱衣所に向かった。

靴下、シャツ、下着と全て脱ぎ終わったところで未来が入ってくる。彼女もまず靴下を脱ぎながら、

「なんだか、こうして一緒にお風呂に入るの久しぶりな気がするね」

「あー、うん、そうだね。ここ何日は別々だったもんね……」

それはつまり、数日間は未来の裸を見ていないということだ。少しずつ露わになっていく彼女の裸体を眺めるうちに、響はこれまでに感じたことのない興奮を覚える。何度も見ているはずなのに、今日は随分と艶めかしく見える。

「きれい……」

「え？ んむッ!？」

最後の一枚を脱ぎ終えた未来に、響は吸い込まれるように、聞き返そうと顔を上げた未来の唇に自らの唇を重ねる。そのまま抱きしめると互いに全裸の肌が密着し、身体の前面に柔らかさと熱が伝わってくる。

「ん……響？ どうしたの急に」

顔を逸らして、響の肩に置いた未来が問いかけてくる。それに対して響は耳元で、

「だって、とつても綺麗なんだもん。今までの未来が何だったんだろうって言うくらいに」

理由は自分でもうまく言葉にできない。しかし、彼女の魅力が急に数段階も上になったのは分かった。だから、より近づきたいと思った。

「そう、なのかな。わたしには分からないけど——でも響、すごい硬くなってる」

未来の手が、響の男性器に触れる。すでに限界まで膨張していると思っていたそれは、外部からの刺激によって、より急角度に反り返る。響自身の身体もピクリと震えた。

「未来だって」

未来にもあるそれに同じように触れると、彼女もまた一瞬体を硬直させる。互いに握り合い、先端を擦らせていると、

「なんか、いつもと違う……すごく気持ちいい」

未来の濃い匂いもその一因かもしれない。散々走り回って汗だくのまま帰ってきて、着替えもせずこうして密着している。それでも陽だまりの匂いがあるから不思議だ。

……あたしの好きなにおい。ずっと守りたいにおいだ。

抱きしめたまま首筋に顔をうずめて深く吸うと、また下半身がビクビクと揺れる。未来に触れられているだけで達してしまいそうだった。

「ねえ響。どっちでほしい？」

間近で囁かれて、気付けば未来の手は響のモノをしっかりと握り、ゆるく上下させていた。皮が伸び縮みする度に快感が増していき、いつの間にか未来のものから手を離してすでに限界が近くなっていた響は反射的に、

「ぜ、全部ッ！ 全部がいいッ！」

そう叫ぶと未来は笑ってしゃがみ込み、握っていた右手で抜きながらまま口にくわえ、さらに左手の指で響の割れ目の中に侵入してきた。

「ふッ……ああああああッ!？」

ヌルリとした温もりとチクリとした刺激に、思わず声が上がって腰が碎ける。それでも未来は器用に離すことなく、上下と前後を続けていた。

「未来、もう、で……ッ！」

「ふん、ひいよひひき、ほのまま、んッ」

グチュグチュと淫靡な音が、未来の顔と指から脱衣所と繋がっている風呂場全体に反響する。その音すらも響の脳には快感となって、耳から下半身に流れていき、ついには爆発した。

「あああッ！ みくッ！ みくッ！」

「んんッ、んんッ!？」

白い液体と透明な雫が同時に響の身体から迸る。未来の口と手を汚していくが、未来の両手はなお動き続けていく。

「みくッ、なにこれ、すごい気持ちいいッ!? こんな、なんでッ！」

未だかつて感じたことのない悦楽に響が戸惑う間にも、未来の口内を犯すように勝手に腰が震える。いや、実際に犯している。すでに未来の口いっぱい白濁としたものが溢れているにもかかわらず、さらに出そうと未来の顔に押し付けていた。

「ぐふッ!? えはッ！」

やがて未来が限界を迎えてせき込み、ドロリと白いものが口からあふれる。しかし手は動かし続けて、響の射精をまだ受け止めようとしていた。

「ああ、あ……」

やがて勢いも衰え射精は止まったが、響の身体はまだ震えている。今まで経験したことのない絶頂が全身を駆け巡り、頭の中が文字通り真っ白になった。

「んッ……大丈夫？ 響」

口の中に残っていたものを飲みこんで未来が問う。響は「なんとか……」と息も絶え絶えに返してくるものの、しばらくは動けなさそうだった。

未来はシャワーを引っ張ってきて、横になったままの響にかけて汗や汚れをある程度落とし、ついでに脱衣所に広がってしまったものも洗い流す。自分もざっと浴びてから響を立たせて、一緒に湯船のなかに浸かった。

「ふう……」

やっとのんびりすることができて、深いため息が出てしまう。

「なんか、ごめんね、未来」

俯き加減にぼつりとつぶやく響に対して、未来は首を振り、「ううん、大丈夫。それよりもどうしちゃったのさつきは？ すごい反応だったけど」

未来が顔を覗き込もうとしてくるが、響は反対側を向いてしまう。それでも自分は耳まで真っ赤だろうなという、風呂に浸かっているのとは別の火照りを感じていた。

「いやー、それがね？ 未来がこう、なんというか、うん……」

正面を向いて言い淀む。が、覚悟を決めて未来と向き合う。

「未来のことが、すごく好きになったんだ、と、思う」

言い終わってからまたしても水面に視線を落とす。直後にはしやばしやと手を振りながら、

「いや、今までももちろん好きだったんだよ!? でもこの好きは違うと  
いますかッ!」

「ふふっ」

その慌てぶりがおかしかったのが、笑われてしまった。しかしその表情は慈愛に満ちているようにも見える。

「分かってるよ、響。わたしもね、さつき脱いだ響を見た時に同じことを  
思ったもの」

「えッ!? つと、それは……ひうッ!」

目を見つめながらも太ももに手を這わせきたかと思うと、自身のスリ  
ットをそつと通過し、そしてその上にある、今は柔らかくなっているも  
のを優しく握った。

「だから、もつと気持ちよくなって欲しいな……」

「えっ……!! いやでも、いくらなんでも連続はきついかとッ! ほら  
もう全然勃たないしッ!」

なんとか回避しようと身を引いて未来の手から逃れるが、

「じゃあ、ご飯を食べたら続きね?」

小首をかしげながらの笑顔を向けられた響は「は、はひ……」と引き  
つった返事をする他なかった。

「……」

「……」

風呂から上がって着替えを済ませ、部屋に届いたパーティーセットを  
二人で食べることにしよ。

……まったくご飯が喉を通らないッ! 食べなきゃいけないのに食べ

られないッ!

響は悶々としていた。考えてみれば、今までしたことは何回かあるが、  
それは二人の雰囲気が出たときに、自然とそうしていたことだった。

ああして宣言してからのというのは初めてのことで、そのせいで緊張が否  
応なしに高まっている。

未来の顔を盗み見れば、普段と変わらずテーブルに広げられた料理を  
食べているように見える。しかし、いつもは会話をしながら食事をする  
のに無言のままなのは、やはり彼女も緊張しているのだろうか。

ましてや今日という日だ。言いたいことは山ほどあるはずなのに言葉  
が出てこない。これからのことで頭がいっぱいいっぱいだからだ。

食べてすぐなのかな? 一息ついてから? それとも寝る時?

あまり食べられてないから、すぐでも問題無いといえは無いが、雰  
気も何もあったものではないな、と響は思う。だったら別に今でも大丈  
夫なわけで、いややっぱり心の準備ができていないから勘弁してほしい。

「ごちそうさまでした」

そんなことをつらつらと考えていたら、未来と同時に食べ終わって感  
謝の言葉を一緒に呟く。

……どうするの!? どうするの!?

戸惑っていると未来は立ち上がり、料理が乗っていたプレートを流し  
へと持っていく。ああそうだよねまずはそうだよね、と響も残りのプレ  
ートを持って後を追いつ、隣に立って中身をぎつと洗い落としてゴミ箱へ  
捨てる。

さて次は何があったかと振り返ると、目の前に未来の顔が迫っていて、

「んむッ?!」

頬を掴まれてそのまま唇を重ね合わされた。風呂場で響からしたのと  
は逆に、今度はされてしまった。

……ハンバーグの味がする。

二人が直前まで食べていたものがそのまま匂いとなって鼻腔を満たし  
ながら、未来の舌が響の口内でうねる。グミのような感触が、舌の表面



を、齒の裏側をなぞっていく。

未来の顔が離れると、二人の口の間にできた細い橋が垂れて足元に落ちた。その時になってようやく未来の表情を見ることができたが、溶けるような眼差しをしていて恐らく普通の状態ではない。

「我慢してたけど、でも、もう、ダメ……欲しくて仕方ないの、響のがッ！」

普通じゃなかった。自分以上に大変なことになっている。こっちは言われてから食事中もずっと悩んでいたというのに、彼女は全くそんなことはなかったらしい。まあ確かに宣言した側なのだから、いつでもできるといえばそうなのだが。

「ちよ、ちよっと待って未来、ちよっと休憩しよ、ね？ ほら、お腹いっばいで動けないし」

「やだ。さっき響だけ気持ちよくなって、わたしはまだなんだから。ちよんとわたしも気持ちよくして」

そう言いながら未来は二段ベッドの上にあがっていく。リビングは畳だしカーペットもろくに敷いていないので、するときは必然的にベッドで、ということになっていた。

……今度カーペット買おうかなあ。でも汚れたら洗うの大変だしなあ。いやなんで汚すこと前提なの、と自分で突っ込みを入れつつベッドに上がる。

そこには、仰向けになってゆるく体を開いた未来が待っていた。なんだか犬っぽいな、と思う。こんな風に撫でられ待ちをしている犬の動画をたまに見る。

そんな考えから未来のお腹に手を置くと、くすぐったそうな声が漏れる。脇腹を両手で揉むとだんだん笑い声に変わっていく、最後には、「響ッ！」

叱られてしまった。さながら飼い主に過剰なスキンシップをした犬のように。これじゃどっちが犬だか分からない、と謝りながら思った。

……甘えたいし、甘えられたいんだ。

そのためにはどうすればいいか。少なくとも今やるべきことは決まっている。だから響は未来のパジャマのボタンに手をかけて、上から一つずつ外していく。

徐々に未来の肌が露わになるにつれ、響の情欲もまた加速する。それを理性で押しとどめながら、ボタンをすべて開け終わって視界に入った未来の胸を見つめる。手のひらで包むようにそっとその先端に触れると、ピクリと未来の身体が震えた。

次にパジャマのズボンに手を移す。下着ごと少し下げると、脱ぎやすくなるよう未来が自ら腰を浮かせてくれたので、そのまま足先を通して一息に脱がせた。以前、両足に引っかけたまま愛撫をしていたら下着も含めてゴムが駄目になってしまった。未来も動き辛かったのがあまり良くなかったと言っていたので、それからは全て脱ぐことにしている。

上着だけを羽織っている状態になった未来を見て、やっぱり綺麗だなと響は思う。裸とは違った淫靡さがあり、これからすることが日常的なものではないことを改めて確信する。

「ねえ、未来はどうしてほしいの？」

「……お、おちんちんを、口でして……」

顔を逸らして消え入りそうな声で答える。自分から誘ってきたというのに、恥ずかしさが出てきたのだろうか。

ともあれ、上着を脱がせて、要望通りに未来の膺下あたりまで引っ付いているものを起こして口にくわえると、さっき一緒にお風呂に入ったおかげか石鹸の香りが鼻に抜ける。その時に響がされたのと同じ感覚を彼女も今味わっていると思うと、自身の下半身も急激に硬くなってきた。

顔を前後させると、未来の我慢できずに漏れ出てくる喘ぎ声が聞こえてくる。これはするのでもされるのでも嫌いではないが、未来の顔を見にくくなるのが少し残念だと感じる。ずっと上目遣いに行っているのは意外と疲れるものだ。

「気持ちいいよ、響……」

ふと、いたずら心が湧いた。自分はあれだけ緊張していたのに、未来

が余裕なのが癪に障る。ここは二ヶ所同時に責めてやろう。

響は口を離すと少し下に移動させ、元々啜っていたものを右手に握った。それも少し強い力で。左手は腰に回して未来の身体をホールドし、「えっ、ちよつと、響?」

困惑する未来をよそに、舌を彼女のスリットに這わせつつ、右手で握ったものを勢いよく上下し始める。

「ひびきッ、ひ、つつ強いよッ!」

口の中にあふれてくる水分を音を立てて吸うと、未来の味が口いっぱいに広がった。右手も親指のあたりが濡れてきているのが分かる。一旦手を離してそれを舐めると、さつきとは違う味がして興奮が高まった。

「なん、いつもとちがッ!? ひび、言ってたの、これッ!」

口と手の動きを更に強くすると、未来の言葉がとぎれとぎれに聞こえてくる。快感が前より数倍にもなったような感覚を彼女も感じているのだろう。それは今日という日があったからに違いない。

喧嘩しても仲直りをすれば、その絆はより強固なものになる。元々好きだった相手なら、もっと好きになる。友情だと思っていたものが恋なのだとはつきり理解したことで、未来の喘ぎ声をもって聞いていたとも思うようになる。

「もう、ダメ、でる、でちゃうッ!」

「ん……いいよ、出して。ちゃんと口でしてあげるから」

右手の動きを続けながら、一旦口を離して未来の耳元に囁く。風呂場で未来にされたことと同じことをしてあげようと、右手と口の場所を入れ替えて、啜えながら舌で龟头を刺激しつつ、右手の指先を彼女の割れ目に当てて左右に揺さぶっていくと、

「ひびきッ、ひびきいいいいいいッ!!」

悲鳴と共に、口の中に生温いものが入ってきて、それと同時に右手とシートにも染みが広がっていく。粘り気のあるそれを、溜めておいた唾と一緒に喉を鳴らして飲んだ。未来の濃い味で満たされて身体が震える。

「はあッ、はあ……は……今までより、ずっと、すごい……これっ

て、もしかして……」

その先の言葉を、響は期待をもって待つ。

「響が、好きだから?」

「うん、そうだと思うよ。あたしも今日ね、未来のことが凄く好きになったんだ」

同じだね、と笑いかけると、彼女も微笑み返してくれる。それを見た響は幸福感に包まれていることに気付いた。互いに思い合うことがこんなにも嬉しいことだと、初めて知った。

「だからね。未来をもっと気持ちよくしたいし、あたしも気持ちよくしてほしいな」

響も着ていたパジャマを脱いで裸になる。未来の脚を持ってその間に自らの体を割り込ませて、温かく濡れたシートの上に腰を落ち着けた。

「じゃあ、入れるね……?」

「うん、来て……」

未来の目を見ながら訊くと、彼女も真つすぐに見返しながら頷いてくれた。十分すぎるほど濡れそぼっている未来のスリットに、自分のモノをそつとあてがう。

肉と肉が直に触れる感覚。直前までしていたおかげで滑らかに入っていくそれを二人は見つめる。

「はあ、ああ……ッ! ひび、き……ッ!」

初めてではないとはいえ、異物が身体の中に侵入してくるのは慣れないようで、未来は少し苦悶が混じった声上がる。響はそれを分かりつつも、一気に奥まで突き入れた。

「あ、はあッ!」

途端、未来の身体が跳ね上がる。背中を反らせて腰も浮かせたが、響は腰を掴んで密着させたまま逃がさない。

「全部、はいたたよ、未来」

響が見下ろしながら言うと、未来も快感と喜びが入り混じった表情で見上げる。それが淫靡に過ぎると思ってしまう、更にはこの顔を崩した

いという邪な考えが浮かんだ。  
だから、

「ん……はっ……はう……ハアハア……や……んんッ……」

柔らかな肉体同士がぶつかる音が部屋に響く中で、未来の喘ぎ声あまり聞こえない。我慢する必要はないというように、響は動きを止めて抱きしめながら未来の耳元で囁く。臍あたりに未来にも生えているものが、響と同じように太く硬く当たっているのが分かった。

「我慢しないでいいよ未来。どれだけ大きな声を出したって隣には聞こえないって知ってるでしょ？」

リディアンは音楽学校だ。その寮も当然音楽に溢れるだろうと設計者は考えたように、各部屋の防音環境は完璧らしい。前に二人で騒いだことがあった翌日に隣の寮生にそれとなく訊いてみたら、何も聞こえなかったとのことだった。

……もしかしたら気を遣ってるのかもしれないけど……

少なくとも響たちは隣の部屋から音が聞こえてきた覚えは無い。未来がピアノを弾いていてもクレームが入ることは皆無だったし、大きな声を出しても問題ないということだ。

「でも、恥ずかしいよ響……」

「どうして？ 未来とあたしの二人だけなんだから、恥ずかしがることなんてないよ。もっと未来の声が聞きたいな……ダメ？」

「ダメじゃないけど、あッ!？」

言ってる途中で一度未来の中を小突くと、不意をつかれた未来の口から先程よりは大きな声が漏れた。

「あたし、未来の声が好き。今日だって未来の声が聞こえなかったら助けられなかったかもしれない。あの声があったからわたしたちはこうして無事だったんだしさ。だからもっと聞かせて。あたしがもう聞き逃さないように」

響が改めて上体を起こして腰を動かすと、今度は未来は口を閉じることなく声を出し始めた。

「ふああ……ッ！ あ、あう……あああああん!!」

普段は聞けない未来の特別な声が耳朶を打ち、響の全身がゾクゾクと震える。自分だけが知っている未来の痴態。一部分だけしか包まれていないのに、全身を抱きしめられているような温もりを感じる。

「ああッ、あ、ああ、んッ、ひうう!! う……ふ、あ、い……ああッ!!」  
だんだん未来の声に遠慮が無くなってきた。腰を打ち付ける度に、中にあるスイッチを押すかのように声が出てくる。

「あッ……やあ……!! うあッ!!？」

少しずつ侵入する角度を変えていくと、未来の声の質が変わった。目を見開いて接合部に視線を下げている。

「ここ？ ここがいいの？」

「……ッ！ ……ッ!!」

腰を押し付けたままグリグリと身体を揺らすと、口を大きく開けたまま声にならない声をあげて背を弓なりにさせる。目には涙が溜まつているようにも見えた。

「すごいきつくなってる……未来もきもちいいんだ、ね」

「あああああああッ!!」

一旦引いてから勢いをつけて抉るように差し込む。そうすれば未来は絶叫しながら身体を跳ねさせた。そのまま抽送を再開していく。

「未来、の、おちんちんも、硬く、なってるね。あとで、入れさせて、あげるから」

「あつ、ああッ……ん、あ、あああッ！ なに、こ……まえより、すぐきもち、いッ！」

身体が揺れるために、未来がとぎれとぎれに伝えてくる。響も前にしたときより格段に快感が増しているのを感じていた。それは恐らく、

「だって、みくのこと、好きって、わかったんだ……ッ！ 助けなきゃ、守らなきゃって、思ってた、そしたら、みくのかお見て、すごく、ドキドキしたからッ！」

「わたしも、ひびきのこと好きッ、大好き！ あっダメ、言ったら、き

もちよすぎて、イっちゃうっ！ 好き、すきッ！ ひびき、ひびきいッ！  
「あたしも、好きだよ、だいすき！ いっしょにいこう未来ッ！ みくうッ！」

もはや二人は何も考えることなく、ひたすらに絶頂への階段を上っていく。部屋には嬌声と肉の音、ベッドがきしむ音に水の音も少し混じりながら鳴り渡っていた。

「ひっ……ふ、あああああああッ!!」

「みく、う、くう……あッ！」

響は強く締め付けられる感触と共に、そこから出るものが未来の中へと注ぎ込まれていくのを震える身体で自覚する。それは今日の中でも最高の快感だった。腰を浮かせた未来が痙攣する度に、響もまた残っているものを吐き出していく。結合部からは白い粘液が垂れ、ベッドに糸を引かせながら落ちるのが見えた。

「はあ、はあ……は、ああ……」

二人は繋がったまま荒くなった息を静めていく。響が名残惜しくも腰を引くと、未来はぶるりと身体を揺らす。

脱力した響は倒れ込むように未来に覆いかぶさり、抱きしめながら互いの体を横向きにして至近距離から彼女の目を見つめると、未来もまたまっすぐに見つめ返してくる。

「凄かったね……」

「うん、凄かった」

はにかむように二人は笑う。満足感や幸福感といったものに包まれて急に眠気が襲ってきたが、さすがにこのまま寝る訳にもいかない。

「もう一回シャワー浴びよっか」

「そうだね」

十分後、再び着替えて緊張から解放された響は髪を拭きながら大事なことを思い出した。

「そうだ、この写真も変えなきゃだよね」

タオルを戻して手に取ったのは、数年前に撮られた二人が写っている

フォトスタンドだ。響は屈託なく笑っていて、その彼女に腕を絡められている未来は困ったように、しかし楽しそうな笑顔を浮かべている。

「……」

一瞬寂しそうな表情をした響だが、すぐに顔を反らせて放っておいたままの鞆から一枚の写真を取り出す。そこには決して綺麗とは言えない状態の響と未来が写っていた。

これは今日の夕方、未来をノイズから救った直後に撮ったものだった。二人とも髪はボサボサ、顔は土と涙のあとでグチャグチャになっている。

しかし奥に映る手はしっかりと握り合っていた。

「いやー、改めて見るとんでもないねこれ」

「そうだね。でもわたしは今まで撮ったどれよりも好きだな」

「——うん。あたしも」

フォトスタンドから前の写真をそつと取り出し、新しいものと入れ替える。元の場所に置くと多少違和感があるがすぐに慣れるだろう。

手に持ったそれをアルバムに挟んでから、洗面所に戻ってドライヤーで髪を乾かし合う。同じ石鹸とシャンプーを使っているのに、どうして未来からいい匂いがするんだろうというも思うが、それは未来も同じようでもたまたま訊いてきたりする。

その後、今日何度目かも分からない、ようやくという思いを抱きながらベッドに上がる。今度こそ長かった一日が終わる。もう二回戦をする体力も残っていない。

「くあ……あふ」

横になった途端あくびが漏れた。丁度上ってきた未来に覗き込まれる形になってしまい、少し恥ずかしい。

「お疲れ様、響」

「未来もお疲れ様……たくさん走ったりしたからもう限界だよ……」

すでに瞼が重い。未来が潜り込んでくるのを感じながら意識が遠のいていく。彼女が何か言ったような気がしたが、その言葉を認識する前に眠りに落ちていった。



# コンビニのサマ カミサマ

ひのきデス

家の近くに  
下を履いてない  
コンビニの女神さまが  
出るというアレな噂が  
SNSで広がっていた  
ので夜中見に行ってみた...

なんじゃ  
またお前か

女神さまを  
拝みにいったら  
なぜかまた未来の中に  
出てきちゃった...  
シエム八ちゃんだったよ  
なんてシエム八ちゃん  
復活したとか...  
なんでアルバイトしてるか  
とかはともかく...

私は忙しくてな  
大人しくしていればよし  
私の業務を  
邪魔するのであれば  
実力で排除するぞ?

※芸能人マスク着用中

※神様品出し中

レジ休止中  
THIS REGISTER IS CLOSED  
このレジをご利用ください  
このレジをご利用ください

# いた!

ごめん  
かわいい女神さまの  
撮りたくて...

先ほどから私の  
真影を無断撮影とは

不敬にも  
ほどがある...

# 怒りMAX!

ついそう言ったら  
シエム八ちゃんの  
逆鱗に触れたみたいで...

# 裸身無!

褌神?  
そもそもヒトの  
維持管理するのに  
服など必要ないが

オウナアとやらが  
隠密裏に行動したいなら  
組織の服を着ると  
懸念するのではな  
給金も上げると言っし

08430  
64Gカーレ  
カレーマシN  
10入

とんでもねえ!  
あたしやカミサマだよ!

# 終

女神の種族など詳しくは  
設定資料集を参照してください



アッアッアッ

アッアッアッ

アッアッアッ

しのぶ



Handwritten text: 手を握る

Handwritten text: 抱き合

Handwritten text: 2007

Handwritten text: 2007

Handwritten signature: 2007



あふ、  
もったいね

ぬいぐるみ

どつちが  
あまえんぼ？

ふうふうです

今日は起きたら  
響がお子様  
ちんちんに  
戻っていたので

取り敢えず  
オンナノコの  
部分を犯すと  
可愛く  
イキました

おん

響のナナ  
スリスリ  
してました

えい♡  
が

あふ♡

あふ♡  
あふ♡  
あふ♡

あふ♡  
あふ♡  
あふ♡

あふ、  
あふ♡  
あふ♡  
あふ♡  
あふ♡  
あふ♡



私が響を  
抱くときも  
ある

おぼろ  
おぼろ

私はよく  
響に  
抱かれる  
けれど

ふああん♡

響はこういう時  
意外と  
大事に扱って  
貰いたがるし  
甘えん坊で

正直、私より  
女の子っぽい  
ところがある  
と思う

あう  
みく好き♡

もったい♡

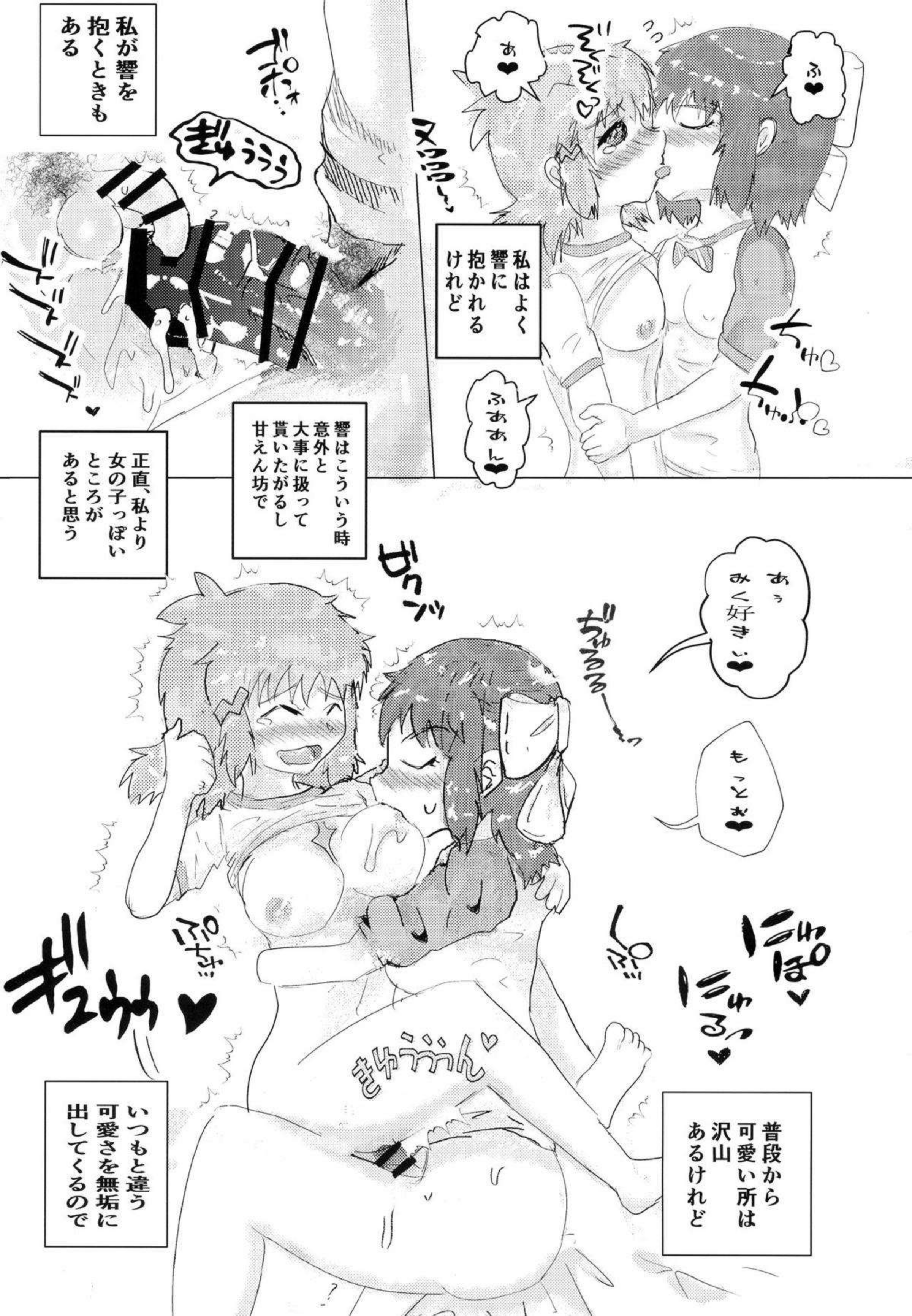
おぼろ♡

普段から  
可愛い所は  
沢山  
あるけれど

いつもと違う  
可愛さを無垢に  
出してくるので

おぼろ♡  
おぼろ♡

おぼろ♡  
おぼろ♡

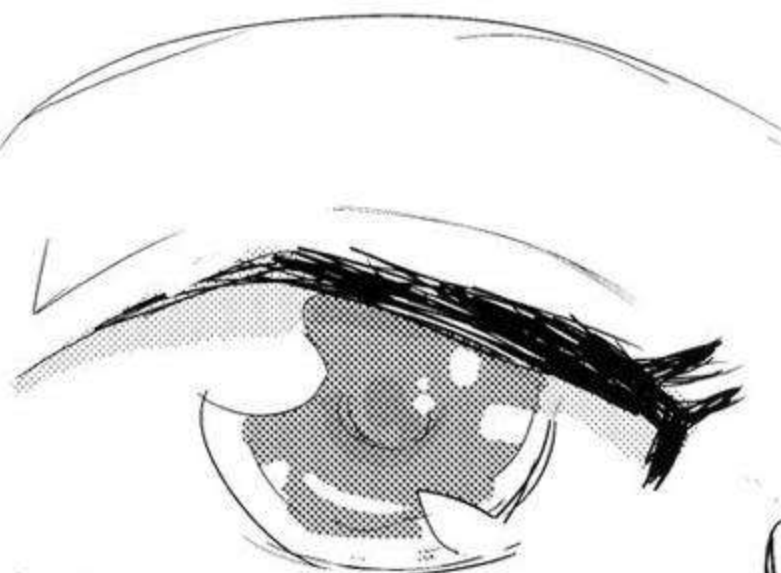


何だか妙な  
嗜虐心に  
かられてしまう  
時がある

ムク

ふあ

ほおり  
お姉さま  
手伝って  
あげるから



ムク  
ムク

あ  
あ  
あ

ぞりっぞり  
しましやう  
ねー



ムク  
ムク

射精して  
えりえり



わふにふに  
してる

あ  
あ  
あ

皮せきせき  
しまも可愛い  
恥垢もいっせいでし  
タマタマも  
ちいさいし

皮のナカも  
きれいきれい  
しようね



響の腔内には  
はいって来た  
んだね♡

しじわぬ...

どっかが  
大きいかね？

は、は、  
はあ♡

ほーり  
兜合わせー♡



未来の  
はか

もうえっち  
してあげな〜

ガーン

あー！  
み、くり...



う、嘘

えっち  
すゆ♡

響がり私の  
ガーマン♡

たんと  
でてるよ♡

いわない  
れえ...

ニッチの  
穴はどうかな♡

え、えっち  
らぬ...!!



射精スゴいかな

ハハハ

はあ  
あ

あ

あ  
あ  
あ

ア  
ア  
ア  
ア  
ア

ア  
ア  
ア  
ア  
ア

ア  
ア  
ア

絶対に  
響の方が  
甘えんぼです

未来、  
もっと



メタリ  
ジュエツト



また  
未来の中に入っちゃったの？  
シエム八ちゃん

な、何をたわけた事を！

ど、どう見ても  
お前の愛しい友  
コヒナタミクであらう

見てわからぬのか  
極めて遺憾である



未来  
「いじめんいじめん」



シエム八ちゃんだったら  
こんなえつちなことを  
させてくれないよね

む、無論である  
カミがヒトのメスと  
交わるわけなからう

それに  
私の「おちんちん」  
見てびっくりしない？

これが  
コヒナタミクの  
記憶にある  
オチンチンか

クリトリスが  
肥大化してる  
ようだ？

じゃあ  
今日は  
女の子のちんちんが欲しい  
神様ごっこしようよ未来

未来がシエム八ちゃん役ね

**「とんでもねえ！  
あたしゃカミさまだよ！」**

ひのき



…なん  
じゃと…

「人のおちんちんで  
神様を犯して下さい」  
はい、言ってみて？

未来？



もみ  
もみ  
もみ

「ヒトの  
おちんちんで  
カミさまを  
おかして下さい」

「これで  
よいのか？」

これを…口で  
悦ばせるだ…

よくできました！！  
じゃあいつちみたいにおちんちんに  
ごあいさつして

「いっしょに」



うん よくてきたね  
じゃあ  
おねだりのポーズして

「カミさまなのに  
おんなのこのおちんちん  
ほしいの？」

カミに  
ねだらせるなと...

「お、おのりしろが  
お前を求めているのだ」

じゃあ  
カミさまに  
女の子のちんちん  
いれちゃうよー

あれこれ？  
すると奥に  
ほらほらほらほら！  
するつ入ってるよ  
シエム八ちゃん！  
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ  
伸れぬか  
たわけ！  
怖いではないか！

ヒトの  
おんなのこ  
ちんちんに  
屈するなど...

タチバナヒビキ！

すき





シエム八ちゃん!

未来!

2人とも孕めえ♡

だめ

ヒトがカミを犯すなど!

射精すよ!  
未来とシエム八ちゃん  
2人に射精すよ!

ヒトの子を  
孕んじゃえ!

ヒトのおちんちんごときに...  
カミが...屈する...かっ!

射精されてる...  
ヒトのタネを...



...さすがに  
「ごまかす」って  
かみさま  
屈しちゃったね

綺麗にしてくれるの？

はぁはぁ♡

ふっ

たっ

はっ

たっ



またえつちしようね  
シエム八ちゃん♡

み未来である

はぁ

はぁ♡



はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

ムー♡

カクカク

しゅわ

おめ

しゅわ しゅわ

# 思慕 ふっうです



響、おんじゅ

カクカク

カクカク

カクカク

カクカク

カクカク

カクカク

おんじゅ

カクカク

カクカク



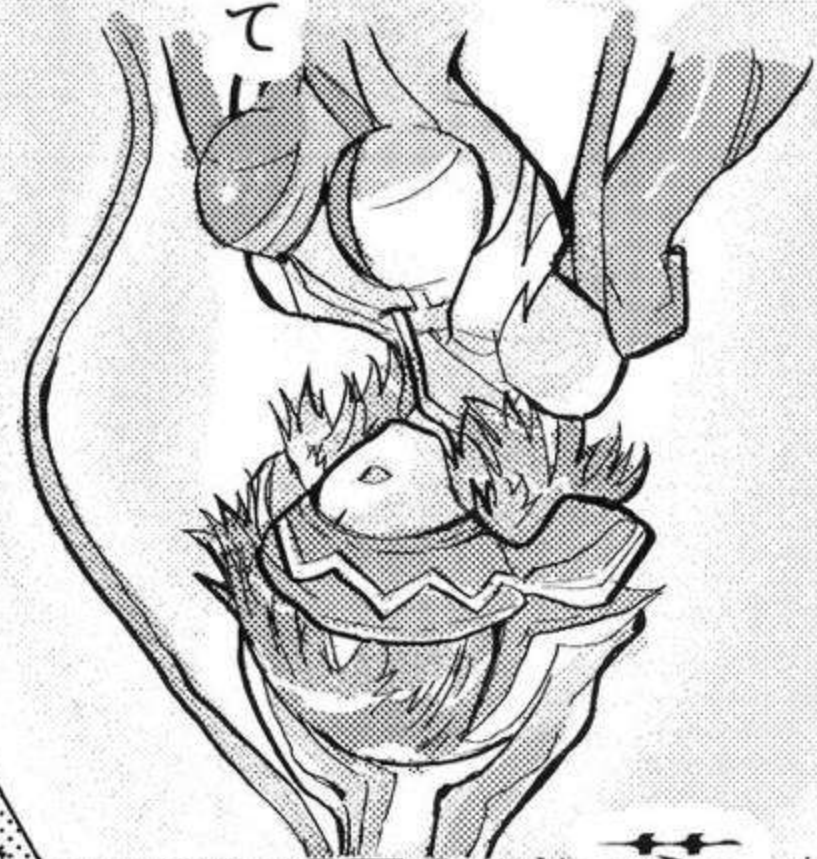
私の事を  
強く信じて  
くれていて



小日向未来は  
私の幼なじみで



ギアを纏い  
救っている  
つもりが  
私が救われて  
いたりして



芯の強い

私の  
大事な人





いつの間にか  
こんな  
仲になって



み、未来、  
のりのり  
だあ...♡♡

大人ちゃん  
がっこよくて  
好きだな

子供ちゃん  
かわいいけど



まっ!?

ただいー

最近の未来は  
積極的だ

おっほい一所懸命  
ちゅうちゅう、  
赤ちゃんみたいで  
可愛いって  
ほんとだよね♡





たまにIP  
またまた  
たまにIP  
またまた  
いん

脆さ  
強さ  
あっさ  
てがと

真直ぐで  
一直線な娘



立花響は  
私の幼なじみ

皆の事を  
思慮する  
優しさと

私の責任で

そんな彼女が  
戦場に赴く  
原因となる  
傷を負ったのは



けれどその傷は  
響にとっては  
奏さんから  
託された大切な  
物で

私との繋がり  
でもあるらしい

私にはそれと  
向き合おうと  
向き合えない  
勇気はない  
のだから  
響は違った















お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

私の響専用  
おまじない

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の

お風呂の  
お風呂の



お、おめでとう……♡♡

おめでとう♡

おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡



おめでとう♡

おめでとう♡

おめでとう♡

お、おめでとう♡



おめでとう♡



お、お……♡



おめでとう♡



おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡  
おめでとう♡

お、おめでとう♡

お、お……♡











ふっふっふ

……

おはよう



えっちな  
みくも大好き  
だよ♡

ふっふっふ

ちゅっ♡\*



もっと  
えっちな  
私にして

もっと  
好きに  
なっ♡



未来♡

ころん!!

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう



響があ♡

未来が私の  
ひだまりで

大好き♡

未来が

好き♡

これっ  
みくが好きだ  
ほしよ

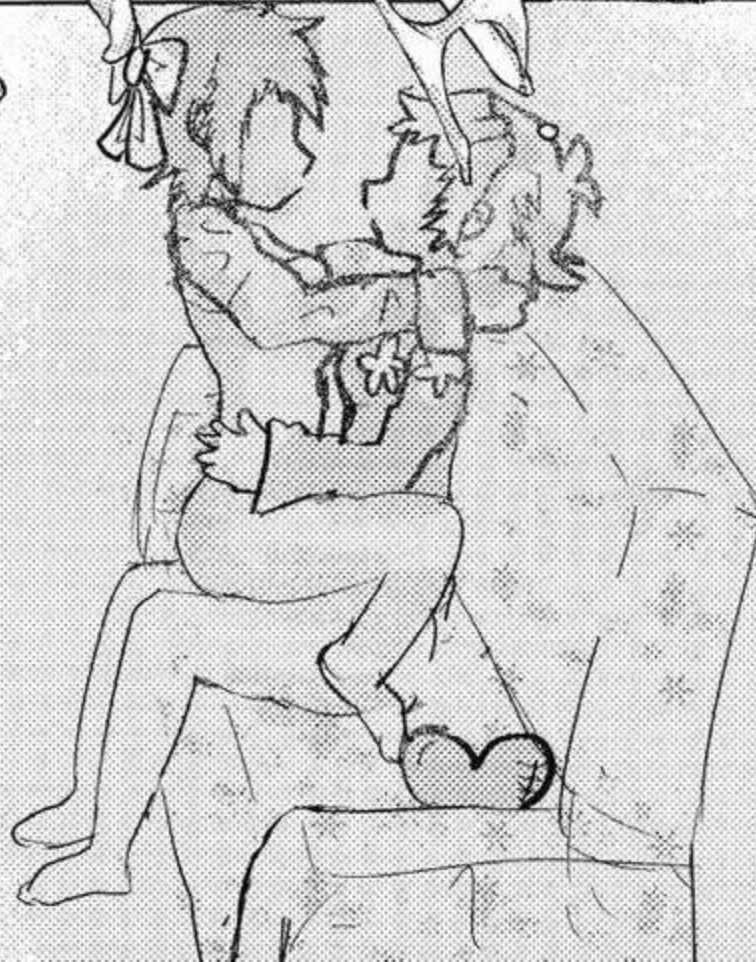


大好き

響が私の  
おひさまで

ふこ♡

わ、私も



ずっ  
と  
在  
る  
様  
に  
な  
れ  
ま  
す



ん

ん

ん

動く腰が

響が  
響が  
動が  
だけ  
でえ

ちゅっ

そんな事...

ない...

あー  
抜いた  
りめえ





おふかえ  
さふあ♡  
響お疲れ  
様♡



はんは  
あ♡



お掃除フェラ  
なの分かってる  
しだけれど



えい  
ふあ

未来が  
可愛いせいに  
しようー

響をれまた  
自分のためー  
あーっ、  
苦いよー

-FIN-

# あとがき

(五十音順)

**アイモ様** (ID=4411868) (お名前右のIDはpixivIDになります)

こんにちは、アイモです。今回カラーやらせていただきました  
ありがとうございます。

イベントにも中々参加できないなかこうやって作品を描かせていただきました。  
またどこかのイベントでお会いできことを楽しみにしています。  
ありがとうございました。

**賀様** (ID=7129)

今回は表紙とイラストで参加させていただきました。  
他の参加者の方々の作品ともども楽しんでいただければさいわいです。

**サントウカ様** (ID=1053084)

ひびみく、みくひびふたなりアンソロジー発行おめでとうございます！  
お誘いありがとうございました、サントウカです。  
ふたなり、いいですよ…好き勝手にあんなのやこんなのが描けて  
楽しかったです(小日向さんのあーんしてるのとか…)  
ありがとうございました！！ ^^

**あみつ様** (ID=2824610)

錚々たるメンバーの中で書かせて頂けて恐縮です……  
でも、久しぶりにひびみく書(描)けて楽しかったです！  
ふたなりものは導入に悩みますが、  
神様だってたまには退屈するんじゃない？って思ってあんな感じに……  
ひびみくの初めて、稚拙ですが挿絵共々楽しんで頂けたら幸いです。  
最後に、主催の普通さん、素敵な合同に参加させて頂き  
ありがとうございました！

**ZET様** (ID=28694240)

普段用を足す時はどっちから出すんだらうとか、  
そういうどうでもいいことばかり考えてました

**白兎 かなか様** (ID=114862)

こんにちは、白兎かなかと申します！  
未来さんの攻めよりに描きましたが反対のもみたい…  
後ずっとちんのたまを描くか描かないかでめちやくちや悩みましたが修正で消えるかも…はい；  
漫画描くの難しかったです…  
なにとぞ本誌をよろしくおねがいします！

## 柊 翔様 (ID=5210995)

未来さん大暴走！！  
未来×響というには響はほぼセリフなしですが  
そこは皆様の想像力でぜひ保管していただき  
皆様の脳内展開をぜひお聞かせください！！

## ひのき様 (ID=30650)

このたびは「普通でいろ」編集長様にお声をかけていただき  
へちよ絵ながら参加させていただいた次第です

## ふつうであ (主催) (ID=33033955)

色々奔走しましたが基本は楽しく初主催業させて頂きました。  
集まってくださった皆様、またお手に取って下さった皆様、  
本当に本当に有難う御座います！(人'▽`)  
ちなみに主催の描いた漫画全て濃い絵柄に濃いトーンを貼ってしまい、  
せめて濃いトーンを外そうかとギリギリまで迷いましたが、  
濃いまま行かせて頂いてます、読みにくければすみませんです。  
あと白兔かなか様のトーン、他台詞、効果などをお手伝いさせて頂きました。  
そしてサークル「黒魔法研究所」のぬかじ様はじめ、ひのき様、アイモ様  
それぞれ漫画に対してのアドバイス本当に有難う御座いました。

ながながとなりましたが、良しなに。

## 文影様 (ID=25195)

今回参加させていただきありがとうございました！  
ちゃんとひびみくの百合が描けてたか怪しいですが  
楽しんでいただけると幸いです！！

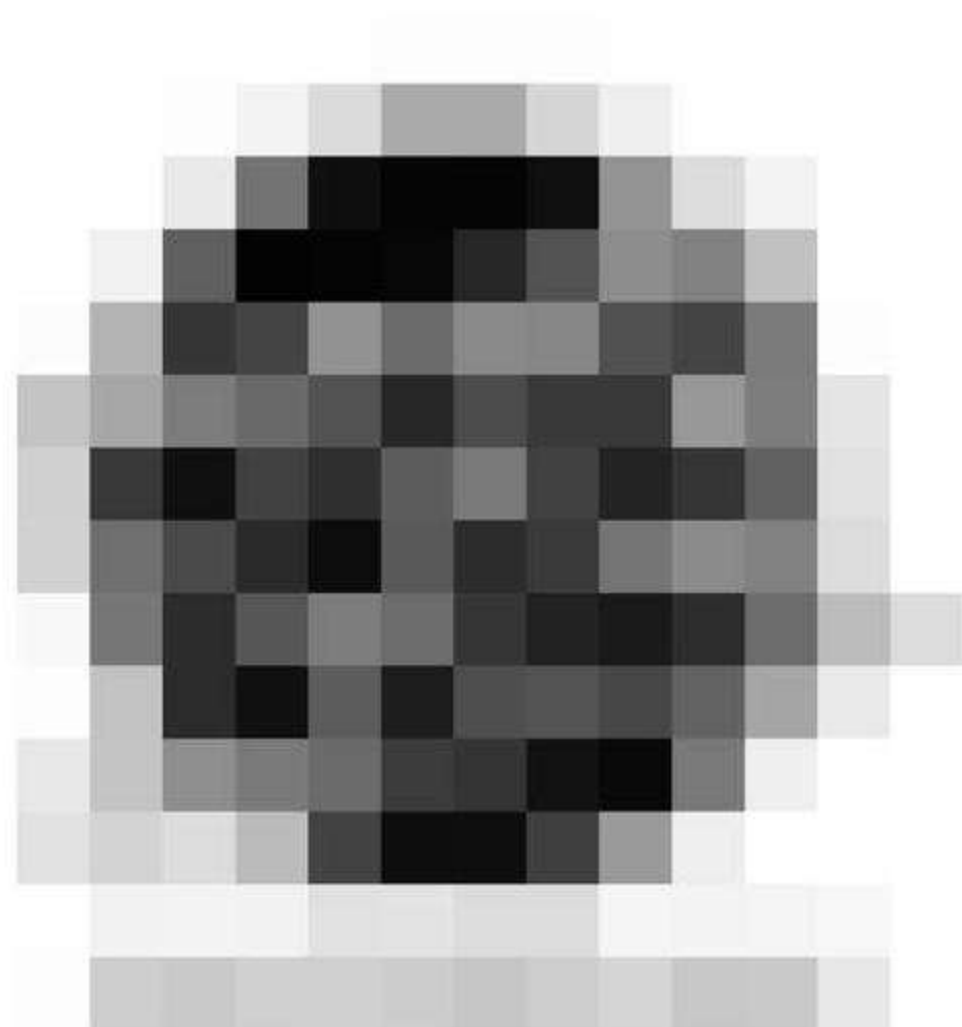
## まきびいん様 (ID=3640153)

初めてふたなり描きました  
恥ずかしかったです  
コロナ禍でイベント開催どころか  
いろんなことがどうなるかわからない状態ですが  
頑張って乗り越えましょう(ノ口ノ)！

執筆者様、読んで下さった皆様、  
印刷所の皆様、応援頂いた皆様、

本当に有難う御座います！！





奥付

「フタリデュエット(二重奏)」

発行日 2021年3月28日

ひびみくふたなりの会が現れた！！  
/主催 ふつうです

連絡先 bouzured@gmail.com

Twitter ntt\_hutuudeiro

印刷所 株式会社栄光



勝て なかったよ...

あれ... 勝った... かな?

ふえ... っ... え...

...だーめ

未来... もうダメ 無理 射精ないよー

オ

響、もっと しめ...

読者様へ  
誠にありがとうございました!! by 主催ふたごです



参加者様

アイモ  
賀  
サントウカ  
すみつ  
ZET  
白兔 (はくう) かなか  
柊 翔  
ひのき  
ふつうです  
文影  
まきびけいし

(五十音順、敬称略)



BY ひびみくふたぎりのかいが

まらわれた!!